

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第1回フォーラム研究会

逐語録

(木村) それでは、今年度初めてのフォーラム研究会を始めたいと思います。

先週、昨年度の報告書のドラフト版を提出しました。まだ皆さんにはお送りしていませんが、業務推進全体会合が5月2日にありますので、それまでにはメールでお送りできればと思っています。

資料の確認をしていきたいと思います。まず、議事次第があります。F1-0 お願いします。次に、業務計画書（一部抜粋）というものがあります。F1-1 お願いします。次に、フォーラム参加者状況という資料があります。F1-2 お願いします。最後に、冊子体の資料があります。F1-3 お願いします。F1-3 は、報告書の一部なのですが、今日の議事に関係がありそうな部分の抜粋になります。

それでは、さっそく始めていきたいと思います。今日の議題は、今年度の事業がどういふものなのかということ、フォーラム関係の今後の予定確認と日程調整、参加者の現状の確認になります。

1. 今年度の事業について

(木村) まず、今年度の事業についてお話しします。F1-1 をご覧ください。

「4. 当該年度における成果の目標及び業務の方法」をご覧ください。今年度は、「(1) フォーラム（第2期）の準備と試行」がメインになります。再委託として、「(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定」がございます。そして、「(3) フォーラムの効果検証とシステム化の検討」を行うということになります。

「(1) フォーラム（第2期）の準備と試行」に関しては、平成25年度に実施したフォーラムを改善し、平成26年度上期に複数回のフォーラム（第2期）について準備し、実施する。フォーラム準備段階の研究者等会合、及び、フォーラムで話し合われたことを記録し、ホームページで公開する、ということになります。昨年度は、これに加えシンポジウムについても記述していましたが、今年度は、フォーラム直後にはシンポジウムは行いません。2月、3月くらいに、研究全体としてのシンポジウムを行うということで、そこで第2期フォーラムの報告も含めて準備をするという計画になっています。

「(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定」は、昨年度土田先生が中心になって行っていた業務ですが、アンケート調査を実施して、分析をするということです。今年度も引き続き土田先生にお願いしたいと思っています。ただ、土田先生は9月

いっぱいまでアメリカに行っていますので、データを送って分析してもらおうという形になると思います。

「(3) フォーラムの効果検証とシステム化の検証」は、昨年度の最後に、フォーラムの要件を整理して、その要件からどういうシステムを作るかという設計をしていますけれども、それについての効果検証を行うということで、インタビューを中心とした効果検証になります。

それを受けて、最終的にフォーラムをシステム化することになります。

ということで、今年度は、昨年度の前半部分をもう一度やって、後半はさらに研究として充実したものにする、ということになります。

何かここまでで確認したいことはありますか？

—— シンポジウムは、具体的にはいつごろ実施する予定なのですか？

(木村) 皆さんの都合がつく時期がいいと思っています。元気ネットさんには、高レベル放射性廃棄物のワークショップとの兼ね合いもありますよね。3月の中旬くらい、もしくは、もっと早い時期に実施してもいいと思います。今年度は、成果自体は12月ごろに全て整理してしまいたいと考えています。ですから、シンポジウムを1月に行ってもいいかもしれません。

2. フォーラム関係の今後の予定確認と日程調整

(木村) それでは、次の議題に進みます。まず、日程調整をしながら、どんなスケジュールで何をするかを確認していきたいと思います。

まず、フォーラムの日程を確認します。第1回は、5月31日です。フォーラムそのものは13時開始ですが、準備も含めて、昨年度と同じように、11時に集まりたいと思います。第2回は6月14日、第3回は6月28日、第4回は7月12日、第5回は7月26日になります。

次に、昨年度と同じように、フォーラム各回の間、前回の反省と次回の準備をする研究会を入れていきたいと考えています。それと、今年度は第1回フォーラムの準備をする日程がちゃんと取れますし、模擬フォーラムもやりたいと思っています。今回はシステム化ということもあって、昨年度のものも見直して、しっかりとしたシステムの中で動いていくということを研究としてやっていきたいということもありますので、入念に準備をしたいと思います。第2回フォーラム研究会でシステム化に向けた準備をして、第3回フォーラム研究会は模擬フォーラムを行いたいと思っています。

それから、以前お伝えしましたが、模擬フォーラムを行う際に、NHKの取材が入る予定

です。

—— 模擬フォーラムは、この事務所でやるのですか？

(木村) フォーラムと同じ会場でやりたいと思っています。席配置なども考えなければならぬので。

第3回以外の研究会は全部事務所でできると思うので、日程を調整するだけでいいのですが、模擬フォーラムのときだけは、候補日をいくつか挙げておいて、会場が空いているかどうか確認して、決めたいと思います。

その他、備考として、第1回業務推進全体会合が5月2日に予定されています。昨年度、システム化の議論が中途半端に終わっていますので、その続きを行いたいと思います。全体会合に関しては、後ほど案内をお送りします。その際に、報告書のドラフト版を添付しようと思っていますので、そちらもご確認ください。

ということで、全体会合の前後くらいに第2回フォーラム研究会、5月31日の第1回フォーラムの1週間くらい前に第3回フォーラム研究会（模擬フォーラム）をやりたいと考えています。まず、第2回フォーラム研究会の日程を調整したいと思います。

(日程調整)

(木村) では、第2回フォーラム研究会は、5月7日の10時から、ということをお願いします。もしかすると3時間くらいかかるかもしれませんが、反省がなく、計画だけなので、2時間程度で終わると思います。

次は、模擬フォーラムをする第3回フォーラム研究会です。時間は3時間取りたいと思います。19日の週か26日の週ですが、いかがでしょうか？

(日程調整)

(木村) では、5月19日を第一候補、21日を第二候補、20日を第三候補とします。時間は13時から16時です。会場の空き状況を見てみてください。空いている日に開催することにします。

次に、5月31日に第1回フォーラムがあつて、その反省と次回の準備をする回になりますが、翌週がいいのか、翌々週の前半がいいのか、どうでしょうか？

—— 私たちの都合よりは、記録をまとめる方の都合をお聞きしたほうがいいのではないのでしょうか。

(木村) そうですね。記録がまとめ終わって、ある程度見えるようになってからのほうがいいのでしょうか。

—— そういう意味では、翌週だと記録作成が間に合いません。翌々週ならば、記録が仕上がっていると思います。

(木村) では、6月9日、10日あたりにしましょうか。どちらのほうがよろしいですか？ これも3時間取りたいと思います。

(日程調整)

(木村) では、第4回フォーラム研究会は6月10日の13時から16時にしたいと思います。

同じような感じで、次は6月24日にしたいと思います。大丈夫ですか？ では、第5回フォーラム研究会は6月24日にします。

次は、7月8日でもいいですか？ では、第6回フォーラム研究会は7月8日にします。

次は、7月22日ということになりますが、よろしいでしょうか？

(日程調整)

(木村) では、第7回フォーラム研究会は、7月21日の13時から16時にします。

ここまですを確認します。第2回フォーラム研究会は5月7日、10時から2時間程度を予定しています。

第3回研究会は5月19、21、20日のどれか。13時から3時間。模擬フォーラムをフォーラム会場でやるということで、いろいろ準備も必要になることと思います。

第4回研究会は、第1回フォーラムの反省と第2回フォーラムのプログラム確定ということで、6月10日の13時から。第5回研究会が、第2回フォーラムの反省と第3回フォーラムの準備で、6月24日。同様に、第6回研究会が7月8日、第7回研究会が7月21日ということで行きたいと思います。

第5回フォーラムが終わった後の反省会も、忘れないうちにやっておこうと思います。できれば、記憶が薄れないけれども、興奮が少し冷めたくらいの時期がいいと思います。8月4日、5日くらいと思いますが、いかがでしょうか？

(日程調整)

(木村) では、8月5日の13時からにします。

そして、このくらいの時期からインタビューが開始されているはずですが、8月いっぱいまでインタビューが行われることになると思います。

続いて、フォーラムに関するダイナミックなスケジュールを皆さんと共有しておきたいと思います。

昨年度と同じく、フォーラム参加者にはコミュニケーション・マニュアルと事前のアンケートを送る予定です。5月19日くらいにはお送りしたいと考えています。したがって、フォーラム参加者の確定はここまでにいく必要があるということになります。

—— できれば、模擬フォーラムをやってからお送りしたいですね。

(木村) できればそのほうがいいですね。模擬フォーラムを受けて、プログラムを組み替えることもあるかもしれないので。では、郵送作業は第3回フォーラム研究会の後ということにします。フォーラムまで1週間ほどありますので、コミュニケーション・マニュアルを読んでもらい、フォーラムの流れが整理できれば、それも送って、イメージを持ってもらえるようにしよう。あとは、アンケートを書いてもらって、それを受付時に提出するというプロセスを、ここで郵送してお願いするという形にしたいと思っています。

それから、先ほども言いましたけれども、8月5日前後くらいから事後インタビューが開始されます。インタビューは8月いっぱいまでかかってしまうと思います。

ここまでの流れはよろしいでしょうか。

その後は、年度末ごろにシンポジウムを予定しています。1月のほうがいいですか？

—— まだ(元気ネットの)予定が分からないのですけれど、6月くらいには日程が分かってくると思います。

(木村) 分かりました。では、シンポジウムの日程は早めに決めるということにしたいと思います。

—— 土日のどちらかですね？

(木村) はい。できれば、土曜日のほうがいいと思います。

第9回になるか、第10回になるか分かりませんが、その頃のフォーラム研究会でシンポジウムの準備をすることになると思います。

あと、今年度は業務推進全体会合を5回予定しています。第1回は、業務の確認が中心になると思います。その後、フォーラム期間中は全体会合をやっている余裕はないので、フォーラムが一通り終わってから、第2回の全体会合で事後報告をするという形になると思います。第3回は、インタビューが終わって、その効果が見えてきた頃に開催するつも

りです。第4回はシンポジウム前、第5回は年度末にまとめを行う予定です。

シンポジウムの日程は、1月から3月の土曜日ということにしておきます。今年度は社会調査がないので、最後がそれほどタイトではないはずですが。場合によっては、シンポジウムを12月にやってしまうのもひとつの手かもしれません。

ということで、フォーラムの日程関係は以上ですが、いかがでしょうか？ では、日程をまとめてプリントアウトしますので、よろしくお願いします。

3. フォーラム参加者の現状

(木村) 次に、フォーラム参加者について話したいと思います。F1-2をご覧ください。これは、昨日の時点で私が確認している情報です。

首都圏住民参加者は、社会調査の結果に沿って、利用層2名、どちらともいえない層3名、廃止層5名という比率を決めました。

利用層は40代以上の男性1名が決定しています。昨日の夜に、この資料を作った後に、20代の男性の方から申込用紙が届いていました。その方を採用するならば、利用層は男性の若い方が1名、男性の40代以上の方が1名、計2名という形になります。2名とも男性になってしまいますが、他の属性との兼ね合いを見て決めたいと思います。

どちらともいえない層は計3名を予定しています。現状としては、若い層の女性が1名、40歳以上の男性が1名の2名が決定しています。あと1名必要ということです。

廃止層はほとんど決まっていません。現時点では、40歳以上の男性が1名、40歳以上の女性が1名ということで、2名が決まっています。

男性は確定が3名、申し込みが1名、女性は確定が2名という状況です。なので、残り5名必要です。昨夜申し込みがあった20代男性の方を採用するならば、若い層があと3名、40代以上はあと1名という割合になります。

あ、すみません、1名、資料に加えるのを忘れていた方がいました。廃止層、20～30代の女性の方1名を表に入れ忘れていました。ですから、廃止層はあと2名です。

20代男性の方を確定してしまうのであれば、利用層は埋まったということになります。ですから、どちらともいえない層があと1名、廃止層があと2名ということになります。その他の属性としては、男性があと1名、女性があと2名、20～30代があと2名、40代以上があと1名、ということになります。

廃止層には、男性の若い方に入っていただきたいところです。男性はこれで終わりなので、あとは女性2名を、どちらともいえない層に1名、廃止層に1名追加することになります。どちらともいえない層が40代以上、廃止層が20～30代になれば、バランスがよいと思います。

以上を踏まえて、皆さんに引き続き募集をお願いしたいと思うのですが、少しご意見を

伺いたいことがあります。実は、首都圏住民参加者 9 名、原子力学会員参加者 9 名にしたほうがいいのではないかと考えています。というのも、10 名ずつにすると、3 グループに分けたときに、3 名対 4 名、4 名対 3 名、3 名対 3 名というように、グループによってばらつきがでてしまうのですね。一方で、9 名ずつにすれば、3 名対 3 名のグループ 3 つに均等に分かれることができます。どう思いますか？

—— 学会員の参加者も、まだ 10 名は決まっていないのですか？

(木村) 学会員は、現在 8 名まで決定しています。原子力学会員のほうの状況を説明しますと、前回の時点では、3 名募集中ということでした。その後、20 代男性の参加が決定しました。あと 2 人については、20 代女性、40 代以上の女性を探すことになっていましたが、現在、20 代の女性と交渉をしています。一方、40 代以上の方にはコンタクトが取れていない状況です。

—— では、もし 9 名にするならば、その中で女性は 1 人ということになりますね。

(木村) はい。原子力学会員の男女比率はほぼそのくらいなので、その点は問題ありません。本当は、学会員も女性が 2 人いたほうが、女性同士の話もあるでしょうし、とは思いますが。

—— 今回も 3 グループでやることが多いのですよね。それならば、9 名で十分という気がします。

—— 9 名にすれば、1 人あたりの話す時間も長くなりますし。

—— 3 名、4 名のグループは、ぎくしゃくしているような感じがしました。やはり 3 名、3 名のグループのほうがきれいな気がします。

(木村) では、第 2 期フォーラムは、3 グループのグループワークをする際に、そのグループ内での公平感を出すためにも、グループ内で同人数になることが大切であるという理由から、首都圏住民参加者 9 名、原子力学会員参加者 9 名という設計にしましょう。

原子力学会員のほうは、今交渉している方が参加されるならばそれまで、駄目だったら新たに女性を 1 名加えて、9 名で打ち止めにする。

首都圏住民のほうは、残り 2 名を追加します。優先順位としては、1 番目が廃止層の 20 代の男性。次が、どちらともいえない層の 40 代以上の女性。3 番目が、廃止層の 20 代女性です。

では、もうしばらく皆さんにご協力をお願いしたいと思います。先ほど、日程のところでも確認しましたが、5月19日の週までには確定したいので、ラストスパートをお願いできればと思います。

4. その他

(木村) それでは、次の議題にいきたいと思います。

まず、今年度の運営陣についてです。名簿では元気ネットさんはお1人増えていたようでしたが…。

—— 新しく入ってもらったのですが、仕事の調整が難しいようです。今度会うときにもう一度確認してみます。

木村先生のほうからは、第1期フォーラム参加者の方のお名前が出ていましたよね。

(木村) はい。その方に、お手伝いしてもらおうかなと思っています。最終段階で、第1期と第2期をつなぐことができれば良いなと思っています。

フォーラムの初回にその旨を説明すると、その方がかなりの影響力を持つてしまうので、最初のうちは内緒にしておいて、最終回に、実は第1期フォーラムの参加者の方に運営側に入ってもらいました、と紹介しようと思っています。最初に言ったほうがいいのか、最後のほうがいいのか、分からないのですけれども。研究上で言ったら、最後のほうが良いですよ。倫理的には最初に言うべきなのかもしれないのですけれども。

—— どういう役回りで入ってもらおうつもりなのですか？

(木村) なんでも良いとおっしゃっていました。

—— ご本人からの希望なのですか？

(木村) はい。

その方は、第1期フォーラムの参加者と自主的に今もつながりを持っていて、ときどき会ったりしているそうです。それも、市民、専門家の両方とつながっていると。

そういう方が第2期フォーラムの運営側にいると、もしかすると、第2期のフォーラムと第1期のフォーラムがつながって、ただ終わっただけの研究にならない面もあるなと思って。ファシリテーションではなくて、いろいろ雑用を手伝ってもらおうとか、そういう形でいいかなと思っているのですけれども。

—— 例えば、受付をやるとか。

(木村) はい。お茶の準備をしてもらおうとか。会場の設営とか。まさに神崎さんの下について、動いてもらう、というイメージです。

ただ、土曜日は大丈夫だと思うのですけれども、他の日に都合がつくかどうかは分からないので、このミーティングに来られるかどうかは分からないのですけれども。今後の日程が確定したので、それをお伝えして、もし参加できるようであればどうぞ、とお誘いしてみようと思っています。

—— フォーラム直後の反省会が微妙ですよ。ね。「ああ、第1期フォーラムのときもこういう話をしていたのか」と思われる内容がありますよね。

(木村) でも、そういうところで第1期と第2期の違いを話してもらえると、面白い気づきがあるかもしれません。確かに微妙な面も出てくるかもしれませんが、準備の会合にもできるだけ参加してもらえれば、そういう溝も少なくなるかもしれません。そういう形で、フォーラム研究会の参加まで含めてお願いをしていきたいと思います。もしかしたら次回からいらっしゃるかもしれません。よろしくお願いします。

事務的な話は以上になります。ここまでで何かお気づきの点はございますか？ よろしいでしょうか。

そうしたら、残り30分くらいですが、フォーラムの再設計について、報告書にどのようにまとめたのかをご紹介しますと思います。資料F1-3をご覧ください。

今回お配りした報告書の一部は、前半は竹中君が、後半は私が書いています。

「3.3.1 インタビューとフォーラム記録による効果検証」に関しては、全体会で竹中君に詳しくお話をしてもらおうと思っています。今日は省略します。

インタビューをして、フォーラムの効果検証をし、特にコミュニケーションという観点から、こういうプロセスがあるのではないかという整理をしました。それが22ページ、28ページにある「コミュニケーションが取れるようになるまでの5つのプロセス」です。22ページのほうは、竹中君がインタビューの中からこういうプロセスがあるのではないかという仮説を立てていったもので、28ページのほうは、したがってコミュニケーションを取れるようになるためのフォーラムは、やはりこの5つの段階を要件として備えるべきである、という書き方になっています。

簡単に言うと、28ページに、

3.3.1の分析によって明らかにされた、フォーラムを経験していない初期状態における市

民と専門家との間にあると考えられる「勘違い」を簡単に整理すると、以下のように整理される。

- お互いに「専門家イメージ」「市民イメージ」は一様なものと認識している。
- 市民の持つ専門家イメージ：「専門家は（議論ではなく）一方的に専門的なことを話してくる」「専門家は自分の考えに固執する」「専門家は『私たち市民には理解できない』と思っている」
- 専門家の持つ市民イメージ：「市民は一方的に非難してくる」「話を聞いてくれないだろう（議論はできない）」

とあります。多くの人が、お互いを、一様なものと認識しているということが、第1期フォーラムで見えてきたということです。

こういう状態から、お互いにコミュニケーションが取れるようになるためにはどうしたらいいか、ということなのですが、コミュニケーションとは「お互いに変容を許容する、相互の情報伝達」のことである、と定義しましたので、段階としては、22ページにも書かれているような5つのプロセスが必要になってくる、と整理しています。

まずは、「判断や価値観（状況）に関する認識」ということで、「1. お互いが異なることの認識」「2. 共通点の認識」「3. 異なることの許容」という3段階が必要になります。ここで、ある意味では「相手を尊重する」という状態ができます。

次に、「態度（行動）に関する認識」として、「4. 相手が変わろうとしていることの認識」「5. 自分が変わろうとする気持ち」があります。これをお互いに持てるようになることで、コミュニケーションが成立するようになるだろう、と整理しています。

26ページに、第1期フォーラムではどのくらい達成したのかということを書いています。首都圏住民は、まったく変わらなかった方もいらっしゃいました。けれども、大部分の方は、「相手を尊重する」という段階（プロセス1～3）を達成しています。今回の事例で言うと、80%の方はプロセス3まで達成されていました。原子力学会員も、プロセス3までは達成できていると考えていいと思います。この辺に関しては、竹中君が今度詳しく話してくれると思います。

一方で、プロセス4、5に関しては、達成できたかどうか、市民に関しても、学会員に関してもあやしくなってきます。

なので、第2期フォーラムでは、どうしたらプロセス4、5が達成されるのかを検討することが野心的な目標になります。もしくは、「フォーラムは、コミュニケーションが取れる状態になるための5つのステップのうち、前段（プロセス1～3）をクリアするためのしかけとして機能するものである」と定義づけるのもひとつの手かもしれません。第2期では、この辺りをしっかりと検証する必要があると思っています。

ここまでの、フォーラムの「コミュニケーション」に関する部分の整理です。29 ページには、その他に、そもそもフォーラム自体が機能するために持つべき要件を整理しています。

「Ⅲ 運営を信頼できる」こと。これは、「6. 運営能力への信頼」「7. 話題を誘導しない」「8. 参加者の公平感」が挙げられます。

「Ⅳ 参加者がコミット感を持てる」こと。「9. 参加者間の対等感」「10. 参加者間の尊重感」を十分に周りから支援する必要がある、ということです。

以上のように、28、29 ページにかけて、10 個のポイントにまとめましたけれども、この10 個のポイントについて整理したものが 32 ページ、33 ページの表になります。

まず、表 3-52 は、「フォーラムが目的を達成するための要件」、すなわち、「コミュニケーションを達成するための要件」に対して意識すべき注意点をまとめています。表 3-53 は、「フォーラムを実施するために満たすべき要件（「Ⅲ 運営の信頼」「Ⅳ コミット感」）」に対する注意点をまとめています。

これらの10 個のポイントに対して、参加者選定、場の設定、オリエンテーションや導入、自己紹介、話題設定、グループワーク、全体共有、振り返り、そして記録という要素はどうあるべきか。さらには、それらの要素を構成するさらに細かい要素として、対話、対話のルール、ファシリテーション、運営について整理をしてみたという表になっています。

ということで、この辺りに注目しながら、第 1 回フォーラムをどう進めるかという設計を作っていきたいと思っています。特に重要なのが、大前提の「目的の共有」です。「参加者がフォーラムの目的とゴールを常に確認できる」と書いてあるのですがけれども、これをちゃんとオリエンテーションでやらなければいけない。あと、「6. 運営能力への信頼」に関して、オリエンテーション・導入のところ、「主催団体の紹介をする」とあります。これは昨年度のシンポジウムでも指摘されていた通り、非常に大切なことだと考えていますので、しっかりやっつけようと思います。最初が肝心だと思いますので、その辺の設計も含めて、次回の研究会で設計案を出して、皆さんに議論してもらおうと思っています。それを受けて、次々回のフォーラム研究会の模擬フォーラムで実際に運用してみて、さらにブラッシュアップしていきたいと考えています。

詳しい内容については省略しましたが、それは後ほどご確認ください。ここまでの何かご意見があればお聞きしておきたいと思いますが、いかがでしょうか？

—— 達成されたのはプロセス 3 までというお話でしたが、プロセス 4、5 についてどのような判断をするかによって、第 2 期フォーラムで何をしたらいいか、何をテーマにしたらいいか、運営はどうしたらいいか、が変わってくると思います。この辺りについて、何かヒントはあるのですか？

(木村) 竹中君とも議論しているのですけれども、でもこちらでコントロールはできない、という話になっています。プロセス4、5を達成しているのは、分析を見ていくと、結局個人の資質に帰着してしまうと。竹中君、その辺について、補足はありますか？

(竹中) プロセス4、5ですけれども、特にプロセス5は、個人の資質との関係が強いようです。首都圏住民で「歩み寄ろう」という気持ちがある方は、フォーラムに参加する前から、自分のやれることをやろうという考え方を持っていた、と話してくださっています。一方で、原子力学会員は、「市民の考え方を知りたい」というスタンスの人が多かったのです。市民に歩み寄ろうと考えて参加している人はいなかったのですね。

それで今回どういうことが起こったかということ、近づこうとしてくれる市民が何人かいらっしゃるわけです。そうすると、専門家は、「もっと近づいてもらおう」という気持ちになって、なかなか「自分から近づこう」という思いに至らなかったということです。

第2期フォーラムでは、そこをどうすればいいかを考えなければならないし、本当にそれを誘導でなくできるのかという点は議論する必要があると思います。

(木村) 結局、第1期フォーラムは、コミュニケーションの一形態ではあったのですが、「お互い」にはならなかったのですね。市民が専門家に歩み寄る姿は観測できた。その逆は、「情報をちゃんと提供すれば分かってもらえるのだ」という認識まではできたけれども、「自分たちが考えを変えていこう」という認識はなかったのです。

—— プロセス4、5までやるべきかどうか、ということも含めて、検証をするということですか？

(木村) その検証をしければいけないし、プロセス4、5をどのように含めていくかということも決めないといけません。ただ、まずはプロセス1、2、3を見ていかないと、いきなりプロセス4、5をやろうとしても難しい気がするのです。

—— そうですね。第1期と第2期はメンバーが違うわけですからね。

5回だったらプロセス3まではできるけれども、もし10回やったらプロセス4、5もできるかもしれない。

(木村) はい。フォーラムの機能の限界を明確化することは、特に研究としても大切なことなので。風呂敷を広げると大変なことになってしまうので。

—— 26ページの図の、黒い矢印と縞の矢印の違いは何ですか？

(竹中) 縞の矢印は、ほぼ観測されていないという意味です。例えば首都圏住民であれば、プロセス4を飛ばしてプロセス5に行っているということです。

—— 見ていて、そういうことが分かったわけですか？

(竹中) 見ていてというよりは、インタビューの中で分かったことが多いです。

(木村) あとは、フォーラムの記録と突き合せて分析しています。その変化がどのタイミングで、どういうきっかけで起こったのかも全部整理しています。

—— 誘導はいけないけれども、プロセス4、5が観測できるようなプログラムの組み方も、きっとありますよね。

(木村) そう思います。

例えば、東北大学の北村先生は、昔、賛成派と反対派の対話をやられていました。そのときは、お互いの主張を言うとぶつかるだけなので、自分たちの主張の弱点をお互いに言う、相手の主張のいいところをお互いに言う、ということをあえてプログラムに入れたりしていました。

フォーラムでも、一度そういうプログラムを設定してもいいかもしれません。例えば、それを最初のオリエンテーションでやってみるとか。

—— 原子力学会員で、プロセス1、2がなくて、いきなりプロセス3に行っているというのは、どういうことなのですか？

(竹中) ちょっと難しいところなのですけども、まず、原子力学会員は、「自分たちは市民と違って当然だ」という前提を皆が持っています。だから、「違って当然だ」と思っているという意味で、プロセス3は達成されているのですけれども、ではプロセス1、2を達成しているかという、必ずしもそういうわけではない。自分の市民に対するイメージは何ら変化がない。でも、違っていることを確認したと。

—— 首都圏住民はちゃんとプロセス1、2を経てプロセス3まで行くけど、学会員はプロセス1、2を飛び越して、という話なのですか？

(竹中) いや、基本的には首都圏住民の変化していない人たちと同じようなくくりだと考えていただければいいです。何も変化していないのですが、違って当然だという考えは、学会員全員が持っている、というだけの話です。そういう意味では、首都圏住民同

様、まったく変化なし、という表現でもいいのかもしれませんが。

(木村) そうですね。

—— 首都圏住民も原子力学会員も 3 本の矢印がありますが、変化の仕方が 3 つのグループに分けられるということですか？

(竹中) はい。

(木村) 首都圏住民のまったく変わらなかった人たちは、フォーラムの目的自体が十分に理解できていなかったと思われる方々です。原子力学会員で、いきなりプロセス 3 に飛んでいる人も、やはり同じです。

—— フォーラムの目的よりも、自分の中の目的のほうが大きいのでしょうか。我々が話す目的を聞いていないのかもしれませんが。

(竹中) そう思われる節もあります。例えば、「市民のこういう考えが分かりました」と言っている原子力学会員の方がいて、私がフォーラム記録を読み返すと、誰もそんなことを言っていないように思える。自分の中の市民像を強めるための情報だけを、どこから取ってきたのか分からないのですけれども、取ってきているようです。もしかしたら、記録に残っていない、例えば歓談のときの話かもしれないので、難しいのですけれども。

—— でも、自分に都合がいいように受け取る、という傾向はありますよね。

—— 専門家と専門家でない人との議論には、知の非対称があるという話があります。要するに、平等ではない。そして、それをお互いが最初に理解していない。人間は、絶えず平等でありたいと思うけれども、専門家と非専門家の議論は民主的ではないと思っている、という話です。それで、最後は何に行きつくかということ、非専門家から専門家を見るときに、倫理性や道徳性などが共通項になっていくのだそうです。

今のお話にあてはめると、ある程度「理解した」と思うときは、共通点をどこかに見つけている可能性があるのではないのでしょうか。

(木村) ただ、報告書のどこかに書いてあると思いますが、いろいろなことを知った結果として、また一様なものと認識し直すこともあるのです。都合のいい、新しい一様像を作り直して、また一様なものとして捉える人もいるようです。

(竹中) 加えると、今回のケースでは、専門家のほうがその傾向が強いようです。

(木村) 本当は、多様な人がいるからこそ、多様な議論ができるはずなのですが、そういう議論にならない。

(竹中) そうですね。一様なイメージをもう 1 回作り直す人もいれば、自分の一様なイメージを壊さないために、「フォーラム参加者だから」「意識の高い人たちだ」というように、例外として扱い始めることもあるので、なかなか難しいです。

—— 年齢の違いによる傾向は見られるのですか？

(竹中) 人数が少ないですから…。

(木村) はい。統計的に言えることではありません。やはり、ひとつひとつの事例として見るべきです。

—— フォーラムは原子カムラというテーマを扱いましたが、フォーラムの手法は、原子カムラに限らず、いろいろなところで役に立つと思います。

—— 私もそう思います。

(木村) そうですよ。この辺りについては、まだ分かりやすく表現できていませんが、丁寧に説明するととても面白いと思います。

—— フォーラムの目的とゴールは、話すだけでは不十分だと思います。言葉になった時点で、受け取り方が全員違うと思うのです。だから、「フォーラムの目的はこう、ゴールはここを目指している」というのが常に目から共通に入るようにしておかないといけないと思います。

—— 大きく書いて貼っておきますか？

—— そうですね。

—— それでも、共通の理解にはならないとは思いますが。

—— そうですね。それでもならない。

(木村) 「コミュニケーションが取れるようになるための 5 つのプロセス」を最初から示して、これが大切ですよ、と言ってしまうのもひとつの手なのですよ。

(竹中) そういう意味では、今回は「尊重できるようになる」ことが目的だと言っていました、「尊重する」という言葉がそもそも難しいというか。実は、整理をする中で、私と木村先生の中で認識がずれていたところもあって。

—— どういうふうにずれていたのですか？

(竹中) 木村先生としては、プロセス 5 までがフォーラムの目的なのですか？

(木村) いや、プロセス 3 までです。プロセス 4、5 は、野心的な目標です。本当は、プロセス 4、5 がコミュニケーションなのだけど、そもそも 3 までができていないのに、4、5 ができるわけがない、というのがフォーラムの設計です。ちゃんと順番に 1、2、3 をやらないと、4、5 なんてできませんよと。

—— プロセス 3 できえ、話すことによって、ようやくできることですよ。

(木村) はい。だから、今年度の報告書は「対話」と「コミュニケーション」というふうに、ちゃんと言葉を使い分けようかなと思っています。

—— 「許容する」のは難しいですよ。

(木村) そこが難しいところです。相手の考えを許容するのも難しいし、自分が変わることを許容することはもっと難しい。「コミュニケーション」は大変なことなのです。

—— 変わろうと思うと、それまでに自分がやってきたことを否定する部分もあるじゃないですか。それをしたくないという気持ちがどうしてもあります。

(木村) だから「君子は豹変す」という言葉があるのだと思います。

—— 「コミュニケーションが取れるようになるための 5 つのプロセス」は、4、5 という番号がつくのですか？

(木村) 順番が、ということですか？ プロセス 4、5 は同時に起こる、並列かなと思

っているので、番号は便宜的につけています。

—— 相手が変わるのを受け止めたときに、自分が変わっていくということですか？

(木村) 自分から変わろうと思うけど、相手も変わってくれるという認識があったほうが、自分が変わりやすいかなと思って、こう書きました。でも、今回の分析からすると、必ずしもこのステップではなかったと。

(竹中) そうですね。ただ、やはり相手が変わろうとしていることによって、自分も何か変わらなければ、という変化はある程度ありました。その変化が、第1期の専門家は、「もっと説明しなければならぬ」という方向になってしまったというだけで、やはり相手の変化を見るというのが最初に来ることが多いのかな、という感じはします。

(木村) あと、難易度から言ったら、プロセス4のほうが易しい。先ほども個人の資質と言いましたが、最初からプロセス5のセンスを持っていた人がプロセス5を達成したのであって、それを持っていない人は、言葉は悪いですが、プロセス3で止まってしまっている。尊重はできたけど、その先まではまだ行っていないですね。

—— でも、私は、プロセス3まででも十分だと思いますけれども。

(木村) 十分です。

第1期フォーラムでは、専門家で変わろうとしている人がいなかったもので、市民はプロセス4を感じ取れるわけがないのです。だから、市民が悪いわけではなくて、そういう人たちの集まりでは、ここに大きな障壁があるということです。

—— 変わろうとしているかどうかは分かりませんが、少なくとも、それを態度に出さなかったですね。なかなかああいう場では出しにくいかもしれませんが。

(木村) 変化をちゃんと意思表示できるような場が必要かもしれません。

—— プライドもあるでしょうから、皆の前でそういうことを言うのは難しい気がします。

—— 専門家は特に。

—— インタビューでもそういうところは感じ取れなかったのですか？

(木村) 「こういうことに気づきました」という話はよく出てくるのですけれども、「自分がこう変わりました」という話はあまりありませんでした。

(竹中) うーん。「自分がこれからこういうことをしなければいけないと思いました」と言う人自体が少ないですからね。

—— でも、私が市民の立場だったとして、「こういうふうに変わりました」と言えるかと言われると、難しい気がします。

—— でも、首都圏住民ではそうおっしゃった方がいたのですよね？

(竹中) そうですね。「市民参加などをどう思いますか」という質問項目があって、そこでそういう話が出てくるが多かったです。

(木村) 第2期フォーラムは検証が大きな目的なので、最初からこの5つのプロセスをうるさいくらい言っておいて、気づいたのか、それとも、自分が変わったのか、ということに参加者が自分たちで測定可能なようにしておいたほうが、インタビューしやすいでしょうね。

—— そうしたほうがいいと思います。このフォーラム5回を通じて、こういうことを研究したいということを、最初に言ってしまったほうがいいでしょう。

(木村) 第1期は、この5つのプロセスを洗い出すことが大きな目的でした。第2期は、それを検証することになるので、大きな目的として提示したらいいのかなど。

—— ただ、そこにいかない駄目だ、いくべきである、というニュアンスを出してはいけないのですよね。真面目な人、やる気のある人は、プロセス5まで行かないと駄目だ、と思ってしまうかもしれないですね。

—— むしろ、番号は外したほうがいいのではないのでしょうか。番号が振ってあると、人によっては、そのステップを踏んでここに到達したい、と思うかもしれません。

—— 確かに、この書き方だと、プロセス5がゴールだと思ってしまうですね。

(木村) 出し方はもう少し工夫が必要でしょうね。

まあ、でも、プロセス5ができたらすごいことですけどね。

—— 私は、そこまで要求しなくてもいいのではないかと思います。

もう一点は、繰り返しになりますが、こういう議論はいろいろな分野で活用でき、汎用性があると思うのです。その点はどこかに書いてもらいたいと思います。

(木村) はい。原子力ほど厳しい題材もないですからね。他の分野だったら、最初のフェンスが低い状態で始められますから。

ただ、問題がない状態だと、専門家は自分で非常に高い壁を作っているのです。自分から壁を下げるというインセンティブがゼロなので。何か問題を起こしてしまうと、自分で壁を下げざるをえなくなってくる。

—— 農業関係の研究者にインタビューしたら、「まだ原子力分野ははまだ」というようなことを言われました。要するに、原子力はいろいろな意味で議論の対象になると。食品照射は、関心が低いから、議論の対象にならないとおっしゃっていました。でも、そこに潜んでいる問題点と解決手法は、共通している部分が多いはずですよ。そういう意味では、こういう考え方のプロセスを明確にすると、他の分野でいろいろ応用できると思います。

(木村) そうですね。だから、今年度の報告書は、本を作るくらいのもりで取り組もうと思っています。

—— そういう意味でも、NHKの取材は大事ですね。

—— 今話題の STAP 細胞の件で、小保方さんの会見を伺っていても、会見で話されていることがまったく理解できません。週刊誌もニュースも、理研の体質がどうのこうのと言っていますが、ああいうところでコミュニケーションがちゃんと取れているのだろうか、と思います。研究者同士でも、全然話ができていない気がするのです。

—— 原子力学会員にとって、「変化する」というのは、自分の研究していること、仕事していること、考えて実行していることを変えること、という認識が強いのではないのでしょうか。一方で、市民は、専門家と近づくことによって、知らないことを知って、補って、それを「変化」と取れると思うのです。

フォーラムのときに、作為的なことをすることはできないので、インタビューが一番、細かく聞くことができると思うので、学会員に、微妙な変化でも言葉に表していただくような問いを工夫したほうがいいのではないのでしょうか。

(木村) そうですね。

(竹中) そうですね。特にプロセス3、5については、イエスノーで答えられるものではなく、程度の問題なので。プロセス1、2は、気づきましたか、はい、いいえで答えられるのですけれども、プロセス3、5は、どのくらい自分の許容できる範囲が増えましたかということで、非常に聞き方も難しいですし。

—— 首都圏住民と学会員で聞き方も変えたほうがいいのかもわからない。

(木村) 比較もしなければいけないので、ある程度は同じにしなければいけないのですけれども。でも、うまく聞き出すということは大事なので、インタビューガイドは同じでも、少し文言を工夫するとか、いろいろやれると思います。

ということで、だいたい時間になりましたので、今日はここまでにしたいと思います。今日の後半の話は、次回竹中君からじっくり話してもらおうので、ディスカッションしていただきたいと思います。

今後は、5月2日に業務推進全体会合があつて、5月7日に次の研究会がありますので、よろしくお願ひします。では、これで終わりにします。どうもありがとうございました。

以上